

名古屋市内で9年ぶりに再確認されたアナグマ *Meles anakuma*曾根 啓子⁽¹⁾ 野呂 達哉^{(2) (3)}⁽¹⁾ なごや生物多様性センター 〒468-0066 愛知県名古屋市天白区元八事五丁目230番地⁽²⁾ なごや生物多様性保全活動協議会 〒468-0066 愛知県名古屋市天白区元八事五丁目230番地⁽³⁾ 四日市大学環境情報学部 〒512-8512 三重県四日市萱生町1200番地Reconfirm of Japanese badger (*Meles anakuma*) in Nagoya city, central JapanKeiko SONE⁽¹⁾ Tatsuya NORO^{(2) (3)}⁽¹⁾ Naogya Biodiversity Center, 230 Motoyagoto 5-chome, Tempaku-ku, Nagoya, Aichi 468-0066, Japan⁽²⁾ The Naogya Biodiversity Conservation Activity Council, 230 Motoyagoto 5-chome, Tempaku-ku, Nagoya, Aichi 468-0066, Japan⁽³⁾ Faculty of Environmental and Information Sciences, Yokkachi University, 1200 Kayo-cho, Yokkaichi, Mie 512-8512, Japan

Correspondence:

Keiko SONE E-mail: sonekei@hotmail.co.jp

要旨

2022年7月6日、名古屋市西区歌里町の整備工場に1頭のアナグマ*Meles anakuma*が出没し、捕獲された。この個体は今春に生まれた雌の幼獣で、母獣から離れて巣穴に戻れなくなり、工場に迷い込んだものと推察された。市内で本種の生息が確認されたのは、2013年に緑区鳴海町で確認されて以来9年ぶりのことである。

はじめに

アナグマ*Meles anakuma*は食肉目イタチ科アナグマ属に分類される中型哺乳類で、日本では本州、九州、四国に広く分布している (Kaneko, 2009)。アナグマは低山帯の森林や低木林に巣穴のトンネルを掘り、血縁の家族群で生活している (Kaneko, 2009)。愛知県では、個体数が比較的多いとされる三河山間部では農作物を加害する害獣とみなされている (子安・織田, 2020)。その一方で、名古屋市のような都市部では生息の記録が乏しく、名古屋市のレッドリストでは絶滅危惧IA類に指定されている (名古屋市環境局環境企画部環境企画課, 2020)。市内におけるアナグマの生息記録は圧倒的に不足しており、過去40年間で見てみても、確実な記録は2013年9月に緑区鳴海町大清水のブドウ畑で捕獲された一例のみである (野呂, 2015)。ところが今回、2022年7月6日に西区歌里町の整備工場で、1頭のアナグマが

出没し、捕獲されるという例が発生した。市内でアナグマが確認されたのは先の緑区における捕獲例から実に9年ぶりのことであり、極めて希少な事例であると考えられる。そこで、本稿では、個体の発見から捕獲までの経緯について記録を残すとともに、解剖で得られた知見および周辺での生息の可能性について補記することとする。

発見から捕獲までの経緯

2022年7月6日の午前9時頃、名古屋市西区歌里町 (図1) にある整備工場の一角に見慣れない動物が1頭うずくまっているのを工場の従業員が発見し、なごや生物多様性センター (以下、センター) に通報した。通報時に寄せられた動物の外見の特徴から、アナグマである可能性が高いと考えられたため、同日の午後にセンター職員が現地に赴き、その動物を発見した際の経緯につい

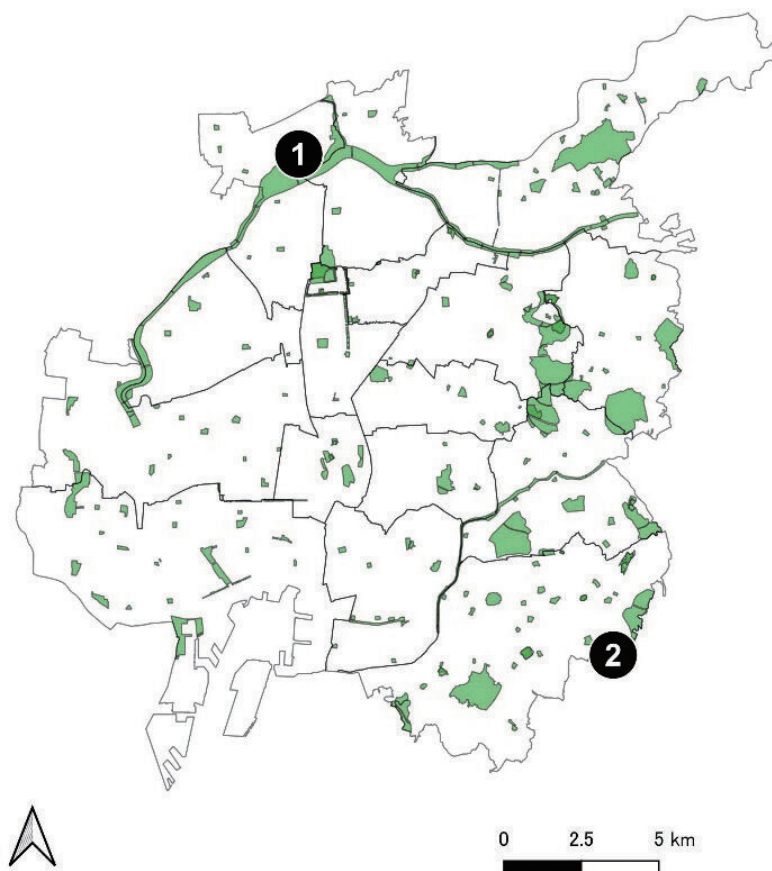


図1. 名古屋市内におけるアナグマの生息確認場所。

図中の1は西区歌里町（2022年7月6日に確認）、2は緑区鳴海町大清水（2013年9月に確認）をそれぞれ示している。なお、図中の網掛部分は緑地を示している。

て追加で聞き取りを行った。発見者の話では、「タヌキでもアライグマでもないネコ程の大きさの動物で、インターネットの画像で見たアナグマに似ている」、「3日前（7月3日）から工場内で動物の気配を感じ、その動物が排泄したとみられる糞を確認した」とのことであった。聞き取りを行っている際、工場の一角から物音がしたため、その場所を確認したところ、1頭のアナグマが潜んでいるのが確認された（図2a）。体格が明らかに小柄であったことから、幼獣であると考えられた。「3日前から気配を感じた」という発見者の証言を考慮すると、今後この個体が自力で移動し、元の生息場所に戻れる見込みは低く、例えこの場所に放置したとしても元の生息場所に戻れる保証はなく、また戻れなかった場合、単独で生存し続けるには幼すぎるものと推察された。このような状況に加えて、整備工場の住民からも「居続け

てもらっては困る」という要望があったため、有害鳥獣捕獲の許可の下、この個体を捕獲することとした。捕獲にあたっては、捕獲の許可を受けた業者が個体をハーネスで生け捕りにして箱ワナに収容し（図2b）、安楽死させた後にセンターに収容した。

解剖・標本化

捕獲された個体（Field No. 22070651）は外部形態計測の後に、解剖および標本化に供された。この個体は、体重2,950 g、頭胴長522 mm、尾長140 mm、後足長87 mm、耳長34.7 mm、性別は雌で、金子（2001）が報告している体サイズとの比較から、生後3か月程の幼獣であると判断された。解剖時、膀胱に腫瘍が認められた。腫瘍の大きさは、短径が2.5 cm程、長径が3 cm程で、切開したところ線虫とみられる虫体が複数確認された

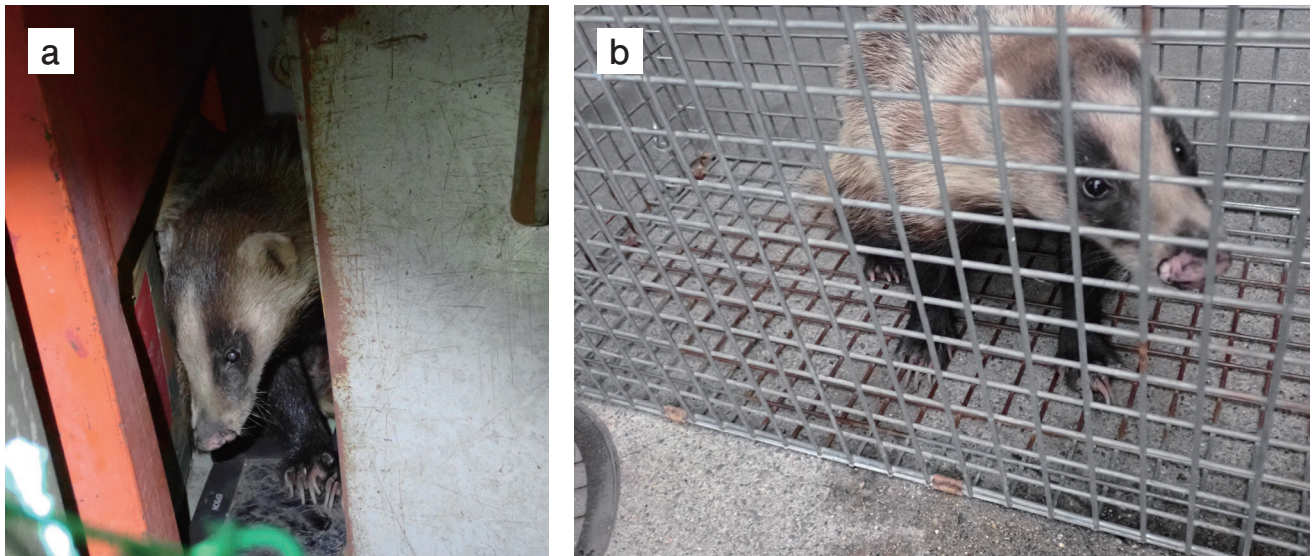


図2. 2022年7月6日に名古屋市西区歌里町に出没したアナグマの幼獣 (Field No. 22070651). (a) 工場の一角に隠れているところ, (b) ハーネスで捕獲して箱ワナに収容したところ.

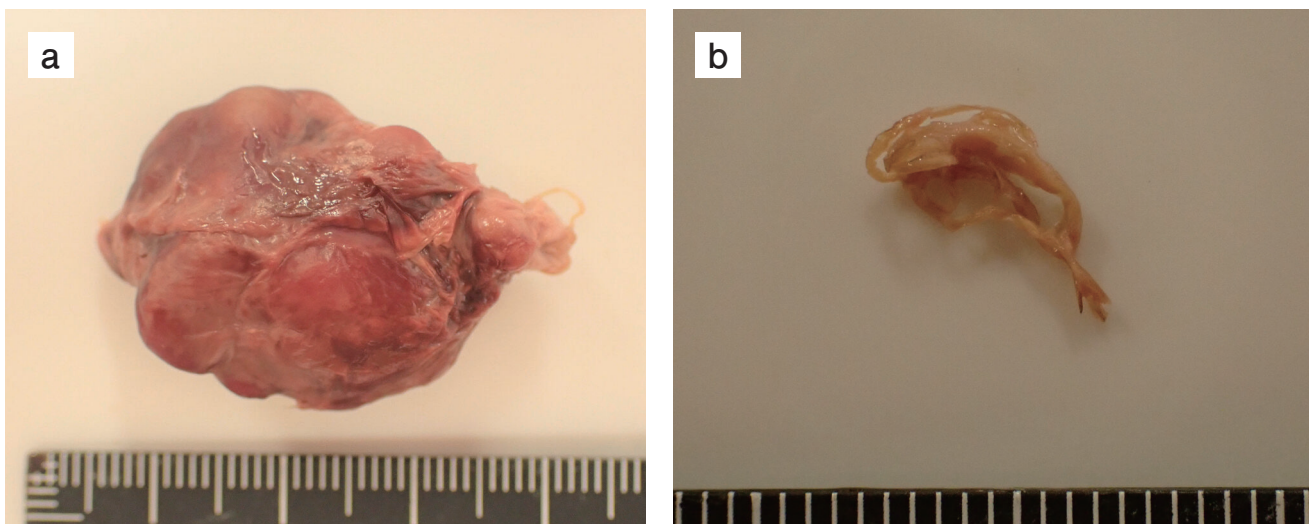


図3. アナグマの幼獣 (Field No. 22070651) の膀胱に認められた (a) 腫瘍および (b) 虫体.

(図3). アナグマの膀胱・尿管には線虫が高頻度で寄生することが報告されており (姉崎・坂庭, 2011), 今回も同様の症例であると考えられた. この腫瘍は70%エタノール液に漬けられ, 液浸標本として保管された. また, 頭骨を含む骨格, 毛皮, 筋組織ならびに消化管が採取され, それぞれ骨格標本, 仮剥製標本, 液浸標本として, センターに収蔵された.

考察

今回, 2013年に緑区鳴海町で確認されて以来9年ぶり

に, 市内でアナグマの生息が確認された. この個体は幼獣であったことから, 発見場所近くで繁殖した個体であることが示唆された. アナグマの成獣メスは巣穴内で4月に出産し, そのまま授乳をしながら6月頃まで単独で仔育てを行い, 仔が離乳時期になった直後は1頭ずつ, 慣れてくると全頭を連れて採食へ出かけるようになるとされている (金子, 2008). 今回の例では, 7月初旬という時期や体サイズからみて, 発見された個体は生後3か月程の幼獣であり, 成長段階としては離乳が済み, 母獣と連れ立って巣穴の外に出ている頃であると推察され

た。以上のことから、巣穴から親仔で遠征した際に、何らかの理由で母獣から離れてしまった仔が、巣穴に戻ることが出来ず、発見場所の整備工場に迷い込んだと考えられた。この整備工場がある西区歌里町は都市域の住宅地であるが、都市公園の五町公園（面積3.3 ha）と隣接している。さらに1 km 圏内に洗堰緑地（面積24.71 ha）、庄内緑地（面積47.39 ha）といった大規模な公園緑地があり、一級水系である庄内川沿いの緑地帯と接している。公園緑地内には、樹林地や草場が広がっており、例えば洗堰では著者の一人（曾根）が2年前にシベリアイタチの死体を拾得した経験がある。また、庄内川沿いの河川敷に広がる緑地では、タヌキ、アカギツネといった中型食肉類が自動撮影カメラで撮影されている（内藤・野呂、未発表）。これらのことから、今回の発見場所である整備工場周辺には、アナグマを含む中型食肉類にとって生息可能な環境が残っていると考えられる。さらに、これらの地域から庄内川沿いに20 km程上流にある守山区の上志段味地区において、2021年度の秋・冬季にイノシシの生息確認用として設置された自動撮影カメラに、アナグマが写っていたという情報が得られている（丹井、私信）。したがって、今回発見された個体は、庄内川の上流域から流出し、周辺の緑地で繁殖した個体であった可能性が高い。近年、都市化の進んだ地域においてもアナグマの生息が確認されている（長光・金子、2017；宮川尚子・下稲葉、2022）。名古屋市内では、アナグマの確認事例は極めて少ないが、今後、増加する可能性もあり、モニタリングを継続していく必要があるだろう。

謝辞

名古屋市内のアナグマの生息情報を提供して下さった（有）トップ・クリエイティブの丹井 隆氏にお礼申し上げます。なお、本活動は「なごや生物多様性保全活動協議会・動物調査と保全対策部会」の支援を受けました。

引用文献

- 姉崎智子・坂庭浩之. 2011. 群馬県のアナグマの膀胱にみられた *Tetragomphius melis* 寄生報告. 哺乳類科学, 51: 59-63.
- 金子弥生. 2001. 東京都日の出町におけるニホンアナグマ (*Meles mels anakuma*) の生活環. 哺乳類科学, 41: 53-64.
- 金子弥生. 2008. ニホンアナグマ-群れ生活も行うイタチ科大型種. 増田隆一（編）. 日本の食肉類-生態系の頂点に立つ哺乳類, pp. 175-199. 東京大学出版会, 東京.
- Kaneko, Y. 2009. *Meles anakuma* Temminck, 1844. In: Ohdachi S., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa, and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 258-260. SHOUKADOU Book Sellers and the Mammalogical Society of Japan, Kyoto.
- 子安和弘・織田銑一. 2020. ニホンアナグマ *Meles anakuma* Temminck. 愛知県環境調査センター（編）. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック2020-動物編-, p. 91. 愛知県環境局環境政策部自然環境課, 名古屋.
- 宮川尚子・下稲葉さやか. 2020. 千葉県立中央博物館敷地内（千葉市中央区）におけるニホンアナグマ *Meles anakuma* の出現記録. 千葉中央博研究報告, 16(1): 69-72.
- 長光郁実・金子弥生. 2017. 東京都府中市の微小緑地における食肉目動物の生息状況. 哺乳類科学, 57(1): 85-89.
- 名古屋市環境局環境企画部環境企画課. 2020. 名古屋市版レッドリスト2020. 名古屋市環境局環境企画部環境企画課, 名古屋, 26pp.
- 野呂達哉. 2015. ニホンアナグマ *Meles anakuma* Temminck. 名古屋市環境局環境企画部環境推進課（編）. 名古屋市の絶滅のある野生生物 レッドデータブックなごや2015-動物編-, p. 43. 名古屋市環境局環境企画部環境推進課, 名古屋.